

教育と教師についての再考

張 揚 (筑波大学大学院/学校経営学)

あの子を探して

(原題: 一個都不能少・not one less)

- ◆ 種別: DVD ビデオ (映画)
- ◆ 監督: チャン イーモウ (張 芸謀)
- ◆ 製作年: 1999 年
- ◆ 製作国: 中国・アメリカ
- ◆ 発売/販売元: ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
- ◆ 時間: 本編 1 時間 46 分
- ◆ 音声: 中国語・日本語
- ◆ 字幕: 日本語・英語
- ◆ 価格: ¥3,990 (税込) 好評発売中



©1999 COLUMBIA PICTURES FILM
PRODUCTION ASIA LTD.
ALL RIGHTS RESERVED.

あらすじ

中国・河北省の貧しい小学校にはたった 1 人の先生が母の危篤で 1 ヶ月間村を離れる。その間、13 歳の魏敏芝 (ウェイ・ミンジ) が代用教師として指名された。ある日、4 年生 (10 才) の腕白な男の子、張慧科 (チャン・ホエクー) が突然都会へ出稼ぎに行き、学校からいなくなった。ウェイが彼を探しに行き、数々の苦労を重ねたうえ、彼を連れ戻すというストーリーである。その原作は、施祥生 (シー・シアンション) が書いた『空には太陽がある』という、村の先生が都会まで教え子を探しに行く作品である。

シーン再現

(ウェイのクラスの子ども 1 人が、都会の学校へ連れて行かれることになった。その子を行かせてはいけないと思って焦るウェイは、土埃がたつ中、村長、迎えにきた教師と子どもが乗る車を必死に追いかける)

ウェイ: 待って、待って、止まって、止まって、止まって…。

教師: あの子、あんなに必死だ。今まで、こんなにしつこい子は見たことがない。

村長: しつこいけど、子どもをちゃんと見守ってくれてる。今は時代が違う。子どもの中退を食い止めることは、教えることよりも難しい。

教師: ちょっと車を止めてもらいますか。

村長: いやいや、止めないで! …止まったら我々が行けなくなる。 (筆者訳)

Chapter

1. 代用教師ウェイが来た / 11'56
2. 大事なチョーク / 24'06
3. チャン・ホエクーが出稼ぎに町へ / 3'28
4. 町へ行くためのお金 / 21'51
5. 町でホエクーを探す / 18'08
6. テレビ局長を探す / 14'49
7. テレビ局の放送を通してホエクーを見つける / 15'26

※ チャプタータイトルは、内容がわかるように筆者が補った



ならない子どもたちや、チョークや文房具すらろくに買えない小学校の実態などを広く世界に紹介し、農村の子どもたちの教育に対する関心を呼び掛けた。そして、お金の代えられないものは何なのかを教えてくれた。

この映画の主役は村長から代用教師に指名された少女ウェイである。厳密にいうと、子どもたちとあまり年齢が変わらないウェイは、何を、どのように教えるかも知らず、ほんらいは教師として認められない。50元という安い給与で雇われたウェイは、代用教師としてただ子どもを教室から出さないように努めたのであり、子どもたちに対する愛着を持っているわけではなかった。しかし、子どもたちとの触れ合いを通して、ウェイは少しずつ変わっていく。例えば、チャンを探しに行くバス代を稼ぐために、何時間で何本のレンガを運べるかを子どもたちと共に計算する経験などを通して、彼女は一教師として成長していく。少女ウェイは、カオ先生からの依頼であった「子ども、一人も減らしてはいけない」という言葉の意味を、少しずつ理解していったのだろう。そして、教師としての責任をも感じるようになっていく。だからこそ、いかなる困難があっても、ウェイはチャンを探した。一人前の教師とは、責任感を貫き通すことではないだろうか。ウェイは最後まで、その気持ちをきちんと子どもたちに伝えた。

現代社会では、教師には実践的指導力や授業力、学級経営能力などが求められている。しかし、本当に求められる「教師像」は、明確だとは言えない。私たちは、一体どのような教師を求めているのか。子どもたちや学校にとって一番必要な教師は、どのような教師であるのか。教師としてもっとも大事なものは、教える技術よりも、子どもに対する愛着心と強い責任感ではないだろうか。この映画は、私たちに涙流させながら、教育や教師の在り方についての再考を迫っている。

Information

☆一人もプロの俳優を使うことなく、登場人物そのもののようなキャストから嘘のない本物の感情を引き出している。たとえばウェイを演じた13歳の少女ウェイ・ミンジ（魏敏芝）は、全国で2千人以上もの候補者の中から選ばれた、河北省の中学校の生徒であった。チャンを演じた10歳のチャン・ホエクー（張慧科）も、河北省の小学校に通っていた。彼らの存在そのものから漂う巧まざるエモーションは、静かにじわじわと私たちの心に染み込んで、いつの間にか胸を熱くし、涙を溢れさせるのである。

☆この映画を紹介した文献として、山本登志哉・伊藤哲司編著『アジア映画をアジアの人々と愉しむ』（北大路書房、2005年、pp.111-164）がある。

責任感と愛着心を持つ教師になろう・・・